

## 寺田 竜太<sup>1</sup>・遠藤 光<sup>2</sup>: 新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う 日本藻類学会第 44 回大会中止に至る経緯について

日本藻類学会第 44 回大会は、2020 年 3 月 26 日 (木) から 28 日 (土) までの 3 日間、鹿児島大学共通教育棟 1 号館で開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の感染拡大に伴い、中止になりました。日本藻類学会の大会が中止になることは初めてであり、今回の中止に至る経緯を記録に残すことは、今後の大会開催に際して参考になるかと思えますので、ここに経緯をご報告します。

大会は 3 月 26 日に評議員会と編集委員会、藻類学ワークショップ、27 日と 28 日に一般発表、懇親会 (27 日)、シンポジウム (28 日) を行う予定でした。また、29 日 (日) にはエクスカッションとして、かごしま水族館を見学する予定でした。大会の参加申込者数は 196 名で、口頭発表 64 題、ポスター発表 72 題、シンポジウム 5 題の発表が予定されていました。なお、懇親会は学内の「学習交流プラザ」で立食形式で予約をしていました。また、未就園児から小学生を対象に、大学近傍の託児施設に託児の予約もしていました。

大会プログラムと要旨集の作成は、1 月 20 日の参加申し込み切から始まりました。例年は大会プログラム原稿と要旨原稿一式を和文誌編集委員会に提出しますが、大会会長の寺田が元・和文誌藻類編集委員長であり、現・編集委員の一人だったことから、寺田が編集ソフトの Adobe InDesign を用いてプログラム編成から要旨集作成までの作業を一貫して行いました。このため、参加申し込み切から要旨集作成までは比較的短期間で終了し、2 月 12 日には大会プログラムを日本藻類学会の website で公開することができました。

この間、新型コロナウイルス感染症は 1 月下旬に中国武漢市を中心に急速に拡大し、日本や韓国での感染者も確認されました。当初は中国からの旅行者や関係者の感染が中心でしたが、2 月上旬にはクルーズ船での感染拡大や、海外に渡航歴のない人への感染が報道されるようになりました。当時はこのウイルスの全容が十分に把握されていませんでしたが、高齢者や持病のある人が感染すると重症化しやすいことが明らかになってきました。また、明確な症状がない段階でも感染を広げる可能性があることや、死者や重症化の報道が相次いだことから、大会開催の危機意識が一気に高まりました。

このような状況から、大会実行委員会の開催方針について 2 月 17 日に参加予定者にお知らせし、立食形式の懇親会は感染症予防対策ができないとして、懇親会の中止を決断しました。ただし、大会の口頭発表会場は、それぞれ約 300 名収容の大型教室だったことから、大会自体は実施の方向で準備を継続し、参加を取りやめる方には、和文誌藻類にプログラム要旨集が掲載された段階で発表したと見なす旨のお知らせをしました。また、今後の感染拡大等によっては、この決定が変更される可能性も言及しました。

しかし、その後も残念ながら北海道や東京などで感染が続く、先が読めない状況になりました。このような状況の中で、2 月 24 日の政府専門家会議において、感染リスクの回避「対面で人と人との距離が近い接触が会話などで一定時間以上続き、多くの人々との間で交わされる環境の回避」が示され、ポスター発表や意見交換が難しい状況になりました。また、感染拡大の防止に向けた政府の基本方針も 2 月 25 日に策定されたことから、学会執行部と協議の上で、2 月 26 日に大会全体の中止を決断しました。大会直前の中止は参加者にご迷惑がかかるため、開催の 1 ヶ月前に決断したという事情もあります。試験研究機関等の一部で「100 名以上の会合への出張自粛」が要請されたことも大きな要因でした。個人的には、シンポジウムを特に楽しみにしていたことから、苦渋の決断でした。

その後は、欧州などの海外に旅行した人からの感染が 3 月に相次ぎ、感染は全国に拡大していきました。鹿児島は長らく感染者のいない状況が続きましたが、全国から参加者が集まる学会はとて開催できる状況ではありませんでした。鹿児島大学では、その後の卒業式や入学式も中止になりました。また、3 月に開催予定だった他の学会も全国的にほぼ中止になっただけでなく、4 月に開催予定だった 7th Conference of the International Society for Applied Phycology (ISAP2020) や、9 月の 9th Asian Pacific Phycological Forum (APPF) も 2021 年に延期になりました。感染者数はその後 4 月にかけて大きく増加し、政府の緊急事態宣言に至ったところは皆様もよくご存じの通りです。

大会の中止に際しては、開催 1 ヶ月前に決断したことと、会場が大学だったため、会場費と懇親会のキャンセル料が幸い発生しませんでした。しかし、大会では中止を想定していなかったことから、キャンセルポリシーを設けていませんでした。そのため、返金のポリシーを急遽設けて告知し、大会参加費と懇親会費は返金に関わる経費等を除いて返金することにしました。今後はこのような場合も想定し、キャンセルポリシーを事前に設けておくことが無難かもしれません。

今回の感染症のワクチンと治療薬が開発されるまでは、これまで通りの生活に全て戻ることは難しいと言われていました。生物系の学会でも、今年の大会をオンラインで開催する動きもあるようです。個人的には、ポスターを見ながらの意見交換や、シンポジウムでの質疑応答、懇親会が大会の醍醐味だと感じていますが、安心して大会が開催できる日の到来を一日も早く期待しています。最後になりますが、第 44 回大会の全ての発表は、日本藻類学会和文誌藻類 68 巻 1 号 (2020 年 3 月 10 日刊行) の 25~72 ページにあるプログラム要旨集の掲載を持って発表したと見なされることを付記します。

(<sup>1</sup> 鹿大・院・連農, <sup>2</sup> 鹿大・水)